

CROSS INTERVIEW

ELIYU HAYASHI

林 映寿

SLACKLINE World Cup 2017
スラックラインワールドカップジャパン実行委員会
小布施スラックライン部 代表

KOUJI KINOSHITA

木下 浩治

SLACKLINE World Cup 2017
スラックラインワールドカップジャパン実行委員会
事務局

元旦発表!!

2017年9月に日本でワールドカップ開催決定!!

——まずは、日本でのワールドカップ開催の元旦での発表。おめでとうございます

二人 ありがとうございます。

——さて、まだ発表して間もないですが、長野県小布施町での開催のワールドカップの詳細や構想などをお聞かせいただけますか？

林 昨年の秋の（小布施町での）大会が、ワールドカップへ向けてのテストの大会でした。日本人選手が急激にレベルアップしているから、世界に通用する選手をどれだけ長野県小布施町に集められるのかが知れたかった。

あと、大会って根本的に選手として参加してもしなくても、見ている立場でも楽しめるのが大切。そうした会場を作り上げられえるのかをもテストをしたかった。地元のケーブルテレビに協力してもらって、開催できたのもよかったです。12月にワールドカップを開催すると内々で言ったときに、タイミング的に、早い段階で発表は早くしておきたかった。ハルキ（木下晴稀）の昨年の成績や、専門誌の出版も年明けに控えているなど、ケーブルテレビ会社の社長も、スラックラインが国内で盛り上がりつつあるって感じてくれて協力いただけたんです。主催はワールドカップ・ジャパン実行委員会で、現段階での共催は小布施町と、その須高ケーブルさん。小さな街で大会を行うので、みなさんに協力してもらいたかった。どこか一企業に特化するのではなく……。そして地元でやっているのに外部の企業ばかりだと寂しいなと思って。ただ、そういった体制にするにしろ、情報発信に長けているパートナーがいるほうがいいなと思ったんです。ケーブルテレビって対外的な活動を積極的に推し進

める会社があるんです。まさに須高ケーブルは攻めの会社で…。海外とかにもコンテンツを販売したりしていますからね。

——ケーブルテレビにとどまらずTBSとかフジテレビなどの地上波キー局に放映権を買ってもらったりすることは考えていますか？

林 スラックラインが、どこまで認知されているのか。キー局がスラックラインに対して、どう思っているのかが気になるところですね。

最初、須高ケーブルさんからも放映権の部分で資金集めを……という話があった。そもそもスラックラインが放映権を払ってくれるほどのコンテンツなのかという疑問があると思うんです。今後は、どんどん認知され、お金の桁も変わるんじゃないかなって思っています。

——そうなるとイベントを運営する資金もワールドカップクラスですね？

木下 スラックラインの可能性って、これから、国内でまだまだ伸びるスポーツだと思って。それに早い段階から目をつけてくれた企業さんはチャンスなのかなって。でも、最終的には人の繋がりがんじゃないかなって。
林 今後、そのあたりの話が進められれば。早急に。今の段階の話を言うと、ケーブルさんはJ-SPORTSさんに声を掛けてみようって言ってましたね。来週早々に話をするみたいですよ。

——これまでに昨年では、GIBBON JAPANさんがTBSの赤坂サカスなどで夏のイベントにスラックラインをピック

アップして開催してくれています。ゆえに、TBSなども話を持ち掛けたら可能性はあるのではないのでしょうか？

木下 イベントをテレビ局の前でやるのは魅力的ですけど、大会となるとどうなのでしょうね。

林 確かに可能性はありますよね。

いいと思いますよ。ただ前提として須高ケーブルさんが協力してくれているので、結局のところ、この土地のPR事業も含めて、どこでイベントをやってもらっても、今後、長野の小布施でワールドカップがあるんだって知ってもらえることも大切です。小布施っていう地名はスラックライン界では認知されていても、全国的には（知名度は）ないかもしれない。特に人気スポーツの繋がりがほとんどない。新たなチャンネルでPRすることができれば、スラックラインをやることで。二子玉川で小布施の選手が出ると、小布施スラックライン部の……っていうだけで、会場を通りかかった小布施出身の学生が立ち寄ってくれました。それだけで効果がある。だから、このワールドカップの大会や関連イベントが、いろんなところでできればって思うんです。



——会場での観戦チケットやそういったことはどうなるのでしょうか？

林 観戦チケット販売をする予定は今のところないです。イベントとして開催することができるけど、（ゲート収入）それで稼ごうって上手じゃないんですよ。昨年の秋の大会も入場費を取らず観戦フリーを実施した。人も集まったし、すごい面白い大会にできた。

木下 あくまでワールドカップを主宰する上で、最低限の資金があれば、それだけでウチらは十分なんですね。

林 このスタイルを変えないでワールドカップ（開催日）まで行きたいなって思います。それが結果として回り回って、僕たちは儲ける必要はないですけど、トントンでやれたらいい。正直、マイナスでも困るし。それから、少し気の早いかなんですけど今回のワールドカップも（スラックラインの）オリンピックに繋がればと思っています。

（現段階では）可能性は低いかもしれないけど、いつの日かオリンピックの舞台でスラックラインを。言うだ

日本スラックライン界を震撼させた長野県小布施町を拠点にしている小布施スラックライン部のキーパーソンの二人。林映寿氏と木下浩治氏が小布施町で開催予定のスラックラインワールドカップの構想を語る。

（左）林 映寿氏 （右）木下浩治氏

——ワールドカップとなると、東京での開催も視野に入れているのでしょうか？

林 ワールドカップを小布施でやるけど、小布施だけで盛り上がらないようにしていきたい。これまでのGIBBON CUPは小布施スラックライン部のメンバーが主となっていた。ワールドカップになると出場しない日本人選手のほうがいいわけです。その日本人選手の多くが、自分ごとに見えるかどうかを考えていかないといけない。関係する人たちも観戦して楽しめるような大会にしたい。それこそビジネスで絡んでもらえる人は、もっと儲けてもらいたい。ドンどん絡んでもらいたいです。ただ、正直なところ僕たちって儲けられない（笑）。

木下 だって、手弁当のようなものですから。でもね、それでも、いままで日本でワールドカップやりたいてずっと思っていたんですよ。ようやく発表ができたので、世界中が驚くような大会イベントにしたいですね。

けはタダ。世界大会もワールドカップも言葉にしていれば叶ったというか。周りの人からよく言われるのが、何で、そこまでできるの？って。どう考えても、みんなボランティア。よく3年も、こんな状況で、やってきたなって。ただ、それが楽しいですよーね。

——やはり、ワールドカップ開催の決意の裏には、小布施スラックライン部の若手たちの日本・世界での活躍あつての決断と思いますが、それについてはどう思いますか？

林 ワードカップ開催のタイミングで、子供たちの成長がついてきて、嬉しいですよ。

木下 ついてきたというか上をいってしまっている気もある。いつか日本で世界チャンピオンを出そうって言ってただけで……、その夢がかなうかもしれないのですから。

林 そうそう、子供たちには楽しみながら世界を目指そうって。僕は、忍耐だ、我慢だって感じて育ってきた。僕、子供の頃にサッカーをやっていた。でも、当時のコーチはよ

く怒っていた。ハーフタイムのときも水を飲んじゃダメとか。何に怒っているのかわからないくらい。楽しくて始めたサッカーなのに、徐々に面白くなってしまっ。そう言った記憶があるなかで、浄光寺に来てスラックラインを楽しく始めたなら、そのままの延長で世界に行けないのかって思うようになった。それが可能ならいいことだし。楽しい=ぶざけるじゃなくて、楽しいから毎日のように練習して、気づけは自分で努力したりするもの。

楽しいってことがベースになるんですけど、人として当たり前なことを徹底します。いくら上手くなっても人として当たり前前のことができないと…。ただ、挨拶、返事、宿題など最低限のことができているのであれば、それ以上は言う必要がないのかなって。

イベントとかで車の運転と重い荷物の運搬などの裏方の仕事は僕たちがするんですけど。イベントのMCも子供にさせる。そのなかで子供たちの間にルールが生まれてくる。もちろん、ダメなときは厳しく怒りますよ。楽しいってことがベースにはあるんですけど、100が楽しいだけじゃない。割合としたりとか2でいい。ウチの息子は木下さんに相当怒られている。昔から、そういったコミュニティで育った。近所の怖いおじさんとか学校の先生とか。僕の子供のことは木下さんがしかってくれる。そういった環境がいいなって思ってます。

木下 小布施のスラックラインをやっている子供たちには、常識外れなことをしていると、誰でも怒っちゃうんですけどね（笑）

林 いい意味で、楽しいからこそ辛さも乗り越えられると思えます。でも、人間の脳科学的に楽しいって思うときじゃないと吸収しないらしいんです。楽しいって思うと、チロトロピンっていう脳内物質が出るそうで、そのときに吸収するんです。そういった環境を大人が作ればいい。そこからは個々の頑張リ次第。このトリックを覚えたいからって15分しか時間がないのに来る子供もいる。それがスラックラインの上達に繋がっている。いくら大人が勉強しろとか言っても子供はやらないし。ただスラックラインの大会で海外に行くと英語って必要なだあって感じてくれるはず。この単語を覚えろって言ってもムダなんですよ。ハルキもそうでした。YouTubeを見て技の名前を覚えていたんですよ。学ぶって、そういうことなんだなって逆に教えられましたね。

——確かにスラックラインを通じて、世界で活躍するのに英語は必要だと思って、必然的に英語の勉強をする環境が生まれたら最高ですね。

林 この（子供たちの）場合は偶然にも世界大会に行ってくれましたが、楽しく学び、世界を目指す。僕が一番伝えたいことは、頂点を目指すだけでなく、スラックライン界で活躍できる子を増やしたい。スラックラインがすごく好きで大会で上位には入れないけど、人に教えることが得

意だとか、人が上達する姿を見るのが楽しいとか、そういった人たちを増やしたいですね。

学校で言うところの半端じゃないけど、いつも勉強しくて…っていう子供が好きで。そういった連中のほうが大人になってからの可能性がある。そういった子供が活き活きとできる場をスラックラインを通じて作れればと思うんです。そういった場所が少ないから。結局、大人の物差しで、オマエは頭がいい、オマエは頭がよくないって分けちゃうから。始めた頃よりは上達するけど、技術的に劣っている子供でも、優れている点はあるから。そういったところを伸ばしたいなって思います。冬になれば雪遊びも、スラックラインもするし。

——ワールドカップをやるぞって、決定したタイミングはいつだったんですか？

木下 12月に入ってすぐですよ。そして、翌月の元旦に発表。

林 来年のGIBBON CUPをどうするかってなったとき…ですかね。

国内戦のGIBBON CUPを小布施でやるか、規模を大きくしてワールドカップで世界中のトップライダーを集めるか。どうせやるならば、世界を相手にやってみたいという思いが強くなったんですよ。ワールドカップをやっちゃえば…。あとオリンピックに向けて何かしないとダメだって。昨年の5月の日本スラックライン連盟の会議で言ったんですよ。そこに協賛をつけて、オリンピックに向けたPRができるんじゃないかって。

ただ、半年経過して、なかなか簡単には決定できず、小布施がワールドカップをやっちゃおうって。日本のスラックラインが一本化しないといけない。バスケがそうだと思うんですよ…。僕たちも新参者だけど、オリンピックにむけて、ここで動くタイミングなんだと感じたんです。オリンピックへの通過点だと思っています。

構想は2年前からあった。町長がいつかは世界大会をやろうって言うてくれていたんです。目標をオリンピックにしたら、いろいろ動いた感じですね。

——このワールドカップのスラックラインはどのラインを使用するのでしょうか？

林 スラックラインインダストリー、ギボンスラックラインズ、エレファント・スラックラインズって、メーカーに寄らない国際大会をやりたいなと思っています。メーカーを問わず、複数本のラインを張ろうと構想です。大会って、メーカーに寄ってしまうものだけど、それをしないでおこうって思っています。

木下 どのメーカーのラインを張ろうが、何本張ろうが問題はないように進めていきたい。

——ワールドカップクラスの大会だと、そのラインの長さにも高さにも気になるところですが。そのあたりはどのように考えていますか？

林 高さは160cm以上になります。長さは、それに見合うだけの長さは用意しますが、25m以上になるかと。160cm～180cmだとジュニアが乗れないから高さを変えたり、複数を張る必要があるなって思っています。あと、NINJAラインっていう新しいブランドを小布施で作ろうっていう話にもなっ。海外にウケそうだし、デザインもできあがっているんです。大会の記念ラインみたいな感じで。そうなれば本当の意味でメーカーに寄らない大会ができるんじゃないかなって。ただ、そのあたりは、まだ詰めてないんです。ジャッジングに対しては決まってますけど、ISIの国際ルールに準ずる形で進めます。ワールドカップとして、世界が驚くような何か面白いことをやりたいなって思っています。

——世界中のトップライダーを一同に集めるとなると、メーカーが異なるトップライダーがいるので。キャスティングが難航する可能性はあります。それはどう思っていますか？

林 基本的には主要なライダーは全員集めたいですね。いろいろ問題があるなら、やっぱりNINJAラインじゃないとダメかな（笑）

——そのほかに海外選手を9月までに招集となると越えなければならぬ問題な山積だと思えますが、それについてはどのように感じていますか？

林 もちろん感じています。前段階のいろんな条件や問題があるはず。宿、食事などもそうでしょう。スケジュールも含めて日本に行きたくないってライダーがいるかもしれない。ただ、世界の選手が来たいと思える条件は整えたいなって思います。ラインの好みって言われると、人それぞれだし。この選手のお好みを知ると、コッチの選手はダメとか。悩みは尽きないでしょうね。

木下 ある程度は、こちらが設置した条件にライダーに納得してもらわないとダメだと思えますね。

——ワールドカップの出場枠の人数は？

林 32名呼びたいです。ISIの国際大会の規定ルールによると最大で32人なんです。

海外選手は、参加枠の半分以上は招待したい。日本人が半分以下ならば、ワールドカップと呼べるにふさわしいイベントにできると思います。

——日本人が半分いてもよい気もしますが。

木下 それはどうして？

——例えば格闘技のK-1などは世界一決定トーナメントと銘打ってイベントをやっていますが8人中4人が実は日本人だったりしています。格闘技の話を引き合いに出すのが適切なかは、まずはおいて置いていただいて、日本人枠は半数以上あってもよい気がします。

木下 ワールドカップなのに、何で彼が出場できるの？って言われなideですかね？

もちろん、やっぱり日本開催だから表彰台に上ってもらいたいし、できることならトップに立ってもらいたいのがありますから。

——そうですね。自国開催なのだから、それは強みとして、僕は日本人の枠は最大限増やしていいような気がしています。ただ、ISIの国際ルールのすべてを把握できているわけではないので、ワールドカップとなると各国に人数制限があるかもしれないですよ。

どちらにしても、小布施で開催となるとハルキにユウガが、燃えないわけじゃないですからね。

林 こうやってインタビューを受けていると、何か、僕たち、正月にものすごいことを打ち上げちゃったんですね。でも、絶対に成功させます。

木下 成功させますんで楽しみにしていってください。

林 このワールドカップを機に、世界にもっともっと日本人選手を送り出す、基盤づくりをしていきたい。個々のスキルがあってチャンスがあって日本代表になるのであれば、もっとバックアップしていける体制をとってきたい。そのチャンスをモノにするかしないかは本人次第だけど、そのキッカケは与えられればいいなって。これから、そうなっていくと思うんです。

